令和5年度　第2回　曳馬小学校運営協議会　会議録（要点記録）

1　開催日時　　令和 5 年 6 月 9 日（金）　午前 10 時 20 分から　午前 11 時 40 分
2　開催場所　　曳馬小学校　多目的ホール
3　出席委員　　鈴木厚（会長）、飯尾忠弘（副会長）、川井啓介、加藤美智子、飯尾智弘、
　　池村俊典（学校支援コーディネーター）、丸茂早織、中津川涼、大野木祥代
4　欠席委員　　小楠和子
5　オブザーバー　大平智史（曳馬協働センター）
6　学校　　竹内孝夫（校長）、影山重広（主幹教諭）、内堀邦子（CS ディレクター）
7　教育委員会　鈴木陽子（教育総務課）
8　傍聴者　　なし
9　会議録作成者　内堀邦子（CS ディレクター　）
10 議長選出
　司会から議長の選出について委員に意見を求めたところ飯尾忠弘副会長が鈴木会長を推挙する旨の発言があり、全員意義なくこれを承認した。
11 協議事項
①　スタートカリキュラムについて　（影山主幹教諭）
②　学校支援の在り方　（竹内校長）

12　会議記録
　新年度が始まり 2 ヶ月経ち、子どもたちのいろいろな姿を見受けられるようになった。
　学校支援は、習字、裁縫、調理実習などの授業中に支援いただき充実した授業を行う事が出来ている。（影山主幹教諭）

　司会の影山主幹教諭から、委員総数 10 人のうち 9 人の出席があり、過半数に達しているため、会議が成立している旨の報告があった。オブザーバーとして、曳馬協働センターの野川敬司さんに参加していただいた。

　第 1 回運営協議会委員議事録の内容について質問があれば、お願いしたい。無ければ第 2 回学校運営協議会の議事に入る。（鈴木厚会長）

①　スタートアップカリキュラムについて　（影山主幹教諭）
　令和 5 年度学校経営構想を参照。
　影山主幹教諭から資料に基づき、学校経営構想のグランドデザインの中に入っているスタートアップカリキュラムについて説明があった。

「昨年度の 1 年生」と「スタートアップカリキュラムを実施した今年度 1 年生」の状況を説明した。
　昨年度よりスムーズに子どもが小学校のスタイルに移行している。

低学年はスタートアップカリキュラムを基本とした教科を横断して関連づけて学習指導していく。高学年になるに従い主体的な思いがでてくるため、それに即して学習指導していく。
従来は学年ごとの指導を行っていたが、教科部を組織し、科目ごとに学習内容を検討し、教師が替わる教科担任制で指導を行う。新しいカリキュラムや学習指導方法に対してご意見をいただきたいと思う。（竹内校長）

幼稚園・こども園・保育園の先生と小学校の先生が互いの現状を理解し、子どもが小学校に入学した際に大きなギャップが生まれないようにしていく。（影山主幹教諭）

スタートアップカリキュラムを行うのは 1 年生だけか。それ以外の学年についてはどうなのか。（中津川委員）

理念を基に学習運営していくスタートアップカリキュラムは、1 年生の 4 月 5 月を指す。2 年生以上もこの理念を基にした単元づくりを行っていく。（竹内校長）

幼稚園・こども園・保育園を考慮した小学校の学習指導では、やりたくないこともやるルールを守る事を指導できないのではないか。進級進学などのきっかけで成長を促すことも大切なのではないか。（飯尾智弘委員）

小学校では、学年ごとの目指す姿がある。例えば、教科学習を習得する姿、学習習慣を身につける姿等がある。幼稚園では子どもの願いを大切にしている。その事を踏まえて、小学校は子どもが自ら勉強したいということを願うように指導することが大切。今後、知識を理解する力、思考力、主体的に学びにむかう力の 3 つの力をつけていけるように指導していきたい。（竹内校長）

入学まで小学校の生活スタイルに適応できる力をつけてきた子どもは、適応できない子どものカリキュラムに合わせているのか。（川井委員）

小学校の生活スタイルに向けた準備は、それぞれの園で方針が異なる。準備が完了している子どもの指導についても今後考慮していくつもり。（竹内校長）

保護者からそのことに対して何か意見等はでていないか。（川井委員）

特に出てはいない。授業はきちんと行っている。今後意見を拾っていきたいと思う。（竹内校長）

わが子は保育園から入学した際、集団が苦手になってしまった。学校のルールがわからず 1 年生を過ごした。現在支援級で学習しているが、最初の段階で学校のルールを家庭に教えてもらえていたらと感じている。スタートアップカリキュラムはとても素晴らしいと思う。いろいろなタイプの子どもがいるので、家庭との連携をよくとってもらいたい。学校と家庭の連携により、家庭でも関わっ

ていけると思う。（丸茂委員）

貴重なご意見をありがとうございました。幼稚園・こども園・保育園では小学校入学までに何が必要かわからない中、いろいろ教育しようと考えている園や、子どもが自ら行動するまで見守っている園など様々な園がある。入学前に育って欲しい事を今後すり合わせしていければと考えている。（影山主幹教諭）

園、家庭、学校と情報を共有していければよいと考えている。（竹内校長）

学校が工夫して指導していることが良く理解できた。教室を飛び出す子どもがいると聞き驚いている。小学校の生活スタイルを身に付けるところからの学習を行っていると、入学前にそれを身に付けてきた子どもはその間足踏み状態になるのではないか。身についていない子どもを温かく見守っていく必要があることは理解できるが、どのくらい身についていない子どもがいるのか。その子ども達が落ち着いていると言うことはすばらしい成果だと感じたが、6 月から 5 時間授業が開始されたと聞き、1 ヶ月以上遅れての開始は問題ではないかと思った。（飯尾忠弘委員）

身についていない子の割合をお答えするのは難しいが、文科省が示すと日本型教育に適応している子どもが 80%とし、それ以外の子どもを 20%と考えられている。適応している子どもの中で、更に発展させていける子どももいる。その子ども達がより成長できるよう、授業数は減っても質を濃くし、「個別最適な学び」により思いきり学べる学校にしていきたい。今年度 5 月まで 5 時間目を切って体力的精神的負担を軽減させ、短い時間の中で内容の質を濃くて、勉強が得意な子達が集中して学べる学校にしていきたいと思っている。（竹内校長）

現場でご苦労されている先生方の現状を理解できた。しかし、入学後のスタートアップカリキュラムとして幼児期までに身に付けて欲しい事が身についていない子どもに合わせたスタイルを全体の教育として勧めているということは問題ではないか。
合科的・関連的な学習とは、例えば生活科の中で算数の学習に触れるということが理解できた。社会的規範を年齢に合わせて教えていくことは大切。ルールを教えていくことは家庭で教えることが基本。園は園での共同生活、小学校は小学校の共同生活の中で体得していくルールがある。家庭でその年齢に応じたルールを教えていかないと園や学校だけで教えていくことは難しい。家庭との連携は大切。（鈴木厚会長）

家庭との連携を図ることが大切だと言うことを改めて思った。今後の取り組みに活かしていきたい。（竹内校長）

中学校のコーディネーターを兼任している立場から見て、各小学校間に格差がある。小学校と中学校の指導スタイルに大きなギャップがあると不登校児童が多くなると中学校からの報告がある。各小・中学校の先生間で情報共有されていると思うが、高学年児童に中学校生活に慣れてい

く場を作っていくよう連携が取れると更に良いと思う。
　現在 3 年生習字のボラティアに入っている。授業に第 3 者が入ると子どもたちが良い意味で緊張するのではないか。第三者がボランティアに入ることで、今まで習字をやらなかった子どもが、急にやりだすこともあった。授業中に突然怒りだす子もいるので、1 人の教師が30人以上の人数を教育指導するのは大変だと実感する。今後 1 年生、2 年生の授業にもボランティアが入り、良い意味での緊張や影響を与えていけるのではないか。（池村委員）

　以前から中 1 ギャップという言葉がある。曳馬中学校から曳馬小学校へ異動してきた立場として、このギャップを埋めていく使命を負っていると思っている。すぐに解決できることではないが、小中学校で連携をとりながら、このギャップを埋めていきたい。
　今年度参観後に中学校の先生が 6 年生の子どもと保護者に対して、中学校生活についてプレゼンテーションを行う予定。期待を持つ子ども、不安が拭えない子どもがいるのではないか。
　授業にボランティアとして第三者が入る事によるプレッシャーは大きな意味で社会性に繋がっていくので、意味のある事と考えている。（竹内校長）

　今年度からは、完全教科担任制で学習指導を行っている。学年全ての先生がその学年全ての学級へ指導に入る。例えば担任とは朝の会の後、給食まで会わないこともある。これは中学校に近いのではないか。学年全体で情報共有し、学年全体で指導に当たる。他の学年もなるべくいろいろな先生が指導に入るようにしていく予定。ただし、3 年生と 5 年生は先生の新規採用研修の関係で教科担任制は上手くできないが、なるべくいろいろな先生が全ての子どもを指導していく。
　月に 1 回中学校の先生と小学校の先生で情報共有を行っている。小学校の教え方や授業を見学してもらい、実態を把握してもらいたいとお願いしている。（影山主幹教諭）

　小学生と中学生の交流が少ないので、大きなギャップが生まれているのではないか。現在、子どもにとって中学校生活を体得していくハードルが高くなっている。学校の授業も大切だが、6 年生になると生徒指導が大切。生徒指導に力を入れていただくと中学生ギャップも少なくなるのではないか。
　今年度スタートアップカリキュラムで小学校生活のスタートを切った 1 年生が今後どのように成長していくか楽しみ。ゆとりを持った指導を受けた 1 年生が 2 年生に上がった姿はどんな成長を遂げるのか。その年齢に合わせた曳馬小学校のカリキュラムで成長を遂げていく子ども達の姿を想像すると成長が楽しみになる。
　保護者と学校が信頼関係を作っていくことが大切だと思う。学校が保護者に対して言いにくいことがあると思うが、事実を伝え合える信頼関係を結んでいくことが今後大切だと思う。（加藤委員）

　入学前に園と小学校で、生活のギャップを埋めようと工夫されていることが理解できた。学校と家庭以外で、学習の場を協働センターが提供していきたい。現在協働センターで行っている講座内容はセンターの職員の趣味になる傾向がある。協働センターに要望いただけると現状必要とされている講座を提供することができる。

言葉での伝え合いが大切ということから、フリーアナウンサーを講師に招き、講座を開く予定。（大平智史オブザーバー）

現在支援員の方が授業のサポートに入っているようだが、対象は1．2年生だけか。3年生の教室に入って欲しい。（大野木委員）

支援員は本来週1、2時間取り出して学習の遅れをフォローするというためにいる先生。実際は人手が必要な学級があり、そちらの対応を行っている。それでも手が足りず、職員室にいるはずの教師がいない事が多いのが現状。（影山主幹教諭）

人手が多いといいが、現状の人員で知恵を絞って対応している。（竹内校長）

④学習支援の在り方の報告

現在の学習支援依頼の報告をお願いします。（影山主幹教諭）

6年生の先生から「生き方について」曳馬小学校出身の若い人に講演をしてもらいたいと依頼があった。2学期開催予定で人材を探しているので、心当たりのある方にお願いしたい。特にPTA関係で適した人材を紹介してもらいたい。
2年生からは公民館及び祭りの屋台見学の6月開催依頼がある。（池村委員）

家庭科の実習授業のボランティアに保護者が1人更に加わった。（飯尾智弘委員）

今年度家庭科の実習授業に4人のボランティアの参加があり、1人で6人の実習を指導できるので、充実した指導が出来ると担当の先生喜んでいる。今月の野外活動で行ったカレーの調理実習では、手を切る子が多数いた。その状況で、家庭か実習のボランティアはとてもありがたい。（影山主幹教諭）

曳馬の公民館は65年前曳馬小の立て替えの際、古い材料を運び建築した歴史的な建物。その公民館及び祭りの屋台見学を2年生全体約90人での見学依頼のため、今まで少人数と違うのでその事を考慮して準備が必要。大変な事だが、地域としてとても嬉しいと思っている。毎年引き受けたい。（飯尾忠弘委員）

学校の取り組みはそれぞれのキャリアで協力したい人はいる。大人に対しての説明と低学年の子どもに対しての説明では話し方や言葉使いが違い、難しい。低学年の子どもに対してはかみ砕いて話すことは難しいと言っている。高学年に対しては協力できる人がいる。
（鈴木厚会長）

その他報告事項等

司会から、次回会議は、令和 5 年 9 月 26 日(金)午前 10 時 20 分から多目的ホールで開催する旨の報告あがった。